

好奇心漫遊記：世の中面白い事だらけ

社会科編-6：上海・杭州紀行

矢澤 洋爾



4月15日(土)16日(月)17日(月)の三日間中国の上海と杭州へ行ってきた。杭州空港に降りて上海へ向かうバスの車窓から見た景色にまず興味が湧いた。3階建ての立派な建物が並ぶ。どう見ても住宅にしか見えない。個人住宅にしては大きいし、共同住宅なら一棟に造っていないのが不思議だ。しかも基本的デザインが同じだ。階段室を中心に両側に部屋を配置するという平面構成を持ち、屋根にはとんがり帽子をかぶせている。個人住宅ならもっとバラエティがあってもいいはずだ。そもそも一人っ子政策の関係上中国では家族構成は3人が基本のはずだ。3階建ての大きな家が必要な訳がない。腑に落ちない僕はガイドさんに確認せずには居れなかった。ガイドさんは事もなげに言う。「みんな個人住宅です。共同住宅はありません。」開放政策を誇示したい

のかその発言には一切の妥協を許さない強い主張が感じられた。「あんな大きな家を建てるって事は、おじいさんおばあさんと同居してるんですか?」「いや、おじいさん、おばあさんとは別々に暮らすのが普通です。」「でもあんな大きな家、皆が建てるわけではなく、お金持ちだけですよね。」「そうです。お金持ちです。」お金持ちだけと言う割には3割から4割はこのような大きな家が並ぶ。古い小さな家はむしろごく少数派だ。中には下のように4階建て（ペントハウス付き）の豪邸もある。お金が沢山あるならもっとデザインにお金を使えばいいと思うのに。両隣の家は多分比較的收入の少ない人の家だろうが、それも不思議なことにデザインは同じであった。



杭州から上海の途中で立ち寄った朱家角。朱という名の人が沢山住んでいたこの名前があるとのこと。明の時代からある街だそうで、運河は残念ながら煬帝が作ったものではないらしい。山形

の橋の名前は放生橋といい、魚を生きたまま放流してやるといいことが起きるとの事で、橋のたもとには生きた魚を売る人が沢山いた。

上海へ行ってみたい、と思ったのは北京のガイドさんが「上海の人は北京を馬鹿にします。上海はもっと近代化しているからです。」と言うのを聞いたからである。高杉晋作が見て驚いた上海を僕もこの眼で見たかった。上海の近代化の象徴、東方明珠塔から見た夜景である。何か物足りない。何故だろう。灯りに面的な広がりがなく、線だけでつながっているだけだからではないか。実際に南京路を歩いてみると通りと交差する道には街灯もなかった。



外灘（バンド）。かつてイギリスの租界があった場所。1842年の南京条約後に作られた町で、高杉晋作(1839～1869)もこの風景を眼にしたに違いない。



上海で最も新しい街、新天地。洒落たコーヒーショップなどがある。この一角に「一大會址」というのがあるのを知った。中国共産党の第一回大会が開かれた場所だと言うのだ。団体の皆が買物を楽しんでいる間僕はこの跡地にある記念館を見ることにした。入場料は3元、約50円。孫文が英雄として展示してある。展示してある人で僕が知っていたのは孫文と毛沢東だけ、他の人は誰も知らない。待ち合わせの時間に遅れてはならじと大急ぎで回ったせいで注意深くは見れなかったが、周恩来も朱徳も展示物の中に名前を見つけることが出来なかった。

杭州は西施の生まれ故里だと言う。街を行く女性に美人が多い。西湖は西施にちなんで名づけられたと言う。どことなく憂いを感じさせるたたずまい。吹く風もひんやりと冷たい。その心持ちを写真にする事はできなかった。



六和塔。10 元出すと上まで登ることが出来る。ガイドさんは「20分自由時間にします。脚に自信のある人は登ってみてください。」と言う。登るのにどれくらい時間がかかるか問うと「12分位でしょう。」との答え。買物の時間は減らしてもいいから、こういうところでもっと余裕のある行程を組んでよ。



旅行の最後は杭州の河坊街。浅草の仲見世といったところか。ある店に中国社会の英雄達の写真があった。スターリンまでが飾られているとは・・・



(06.05.10)